

地質學雜誌第三十九卷

- 2 石川縣珠洲郡誌 大正十二年
- 3 田中啓爾 信州に於ける鐵道開通前の鹽の移入路に就いて 地理教育第十二卷
- 4 珠洲郡西海村産業誌 昭和三年

- 5 專賣局 鹽業實踐諸統計
- 6 辻村太郎 文化景觀の形態學 地理學評論第六卷
- 7 田中啓爾 本州島内陸部に於ける鐵道開通前の鹽の移入路について 地學雜誌四十三

山形地方道・街路の發達に就いて

白田 金兵二

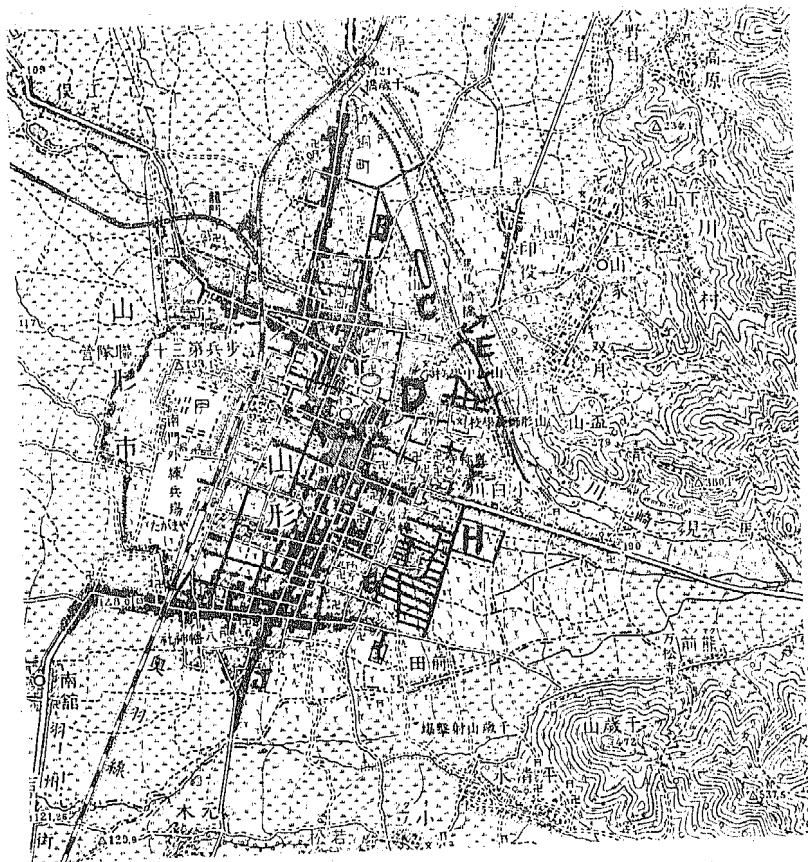
山形城下の盛衰と交通

仙臺藩と東西に相對して五十七萬石の都城として最上義光よしあきが慶長年間に築造した山形城市は膨大であつた。

現に三十二聯隊營所に充てられある處は當時の本一の丸で三の丸内即ち今の香澄町かすみ（二の丸の六倍大）は主に家中上屋敷の所在であつたが、最上氏は僅かに三代にて去り、其後瀕りに相次ぐ小藩の交代で市坊は漸次衰微し、三の丸内西部住區は遂に消滅して田園化し、街路も昔日の

面影を持するのは城地の南東北側即ち上町、五日町、入日町、三日町、十日町、横町、七日町旅籠町、六日町、四日町、宮町等の本通筋其他數條の縦街路が大城下時代よりの町民街として残る狀況であつた。

こゝに於いて山形商人は奮起して發展に努め中には單に山形盆地のみに踞踏せず、當時水路開拓の最上川から日本海を経て敦賀への舟運で京阪地方に山形名産の紅花等を賣り、又山形より人馬で山道を越えて奥羽の各地に物資を鬻ぐ



地圖 記入 (五萬分の一山形、明治四十一年發行、の地圖に記入—實線は新街路—三の丸△印ある箇所が人の交通最も多、日中(十二時間)の交通量一萬四千以上、↑↓印市に出入する人の最も多き箇所)

A 北山形驛及び左澤線
B 宮町、東の新興住宅區
C 縣營新グラントと千歳公園
D 新築 (記入しあるD字の西が西通東方は東通、南が三島通)

E 築地町
F 寺町裏
G 地蔵町
H 共に新住宅區

I 山形高等學校
J 山形商業學校
K 黒太の實線は昭和五年開通、産業大道路(約九百米)
L 又FDAから江俣の方向に馬見岬舊河道があつた。

分には東原がある。
GHの中間、街路のみある部分に東原がある。

等、所謂東北の近江南人と稱せられた程の活躍振りであつた。

當時奥羽山脈の各峠が嶮岨ながら開發されてあつたのは全く商路の關係からである。

維新後の山形と三島縣令

然し明治維新後は地勢有利な仙臺方面が新帝都東京への連絡によりしく、京阪相手の山形よりも却りて優勢となる立場に置かれた。

こゝに於いて人文進展の經路に一轉換期が劃された譯である。

この頃山形縣が設置され(明治九年)庄内置賜を合併し、山形が其管内中心地となつて市況復興の機運に向つた。

此折第一代の長官として來任された薩州の英傑三島通庸氏が酒田、鶴岡の兩縣に歴任して山形縣令となり、後に土木縣令とも稱せられる程に英斷を以つて遂行したのに「新築」の開拓と縣内道路の造設がある。

所謂「新築」の開發

新築とは山形城市を横ぎる馬見ヶ岬川舊河道の畔、萬日河原(まにじつがはら)(市の東北部)以東の區域である。三島氏はこゝに山形商業街の軸線である十日、横、七日町の本通の北方を卜して新縣廳を造り、自ら率先して人夫姿で働き放螺貝で指導し、官吏の夫人等まで紅花染めの日の丸手拭を冠りて手傳ひ、市民も協力歡呼して工を進める等の熱心振りであつたと云はれる。

猶之際出來上つたものは新築西、中、東各通り及三島通り等で、之の方面が縣廳の東に官廳と官舎の設けられる處となつた。

縣内道路開發

地勢上縣管内外が山岳に隔離されてゐるので之を統合、開發し、且つ表日本より東京への連絡をつける爲めの方策上先づ新時代に應ずる車道の急設を認めた彼縣令は敢然之が企圖に決し所謂抜山の意氣を以つて着手した。

先づ最初に當つたものは栗子隊道(起工明治九年落成十三年)米澤から今の萬世村を徑て福

島に通ずるもの、山形縣としては正に表玄關口と云ふべき處である。

次に猿羽根峠（明治十年より十一年迄）の坂道を開いて山形・新庄間を結び、又磐根新道（同年）を古口村の西方、最上川の左岸に築いて新庄・庄内間を連ね、次いで飽海郡海岸北端に三崎新道及び新庄の北、金山、及位の新道（明治十一年より十年迄）にて秋田縣に通じ、猶其の間に三河橋（鶴岡）常磐橋（山形の南）相生橋（米澤）等の橋梁、早坂（上ノ山の北）新道其他管内貫通道路に大修理を加へた。之に依つて縣内は新文化輸入の大動脈となる車道が完成して北より南に縦貫し更に帝都へ達する利便を得た事は地方開發に資する處極めて大である。

この幹線道路完備の翌、即ち明治十四年には畏くも明治大帝東北御巡幸の御途無窮の光榮に浴し、坦々たる大道に鳳輦を奉迎する事が出来たのである。

行幸御巡路——秋田縣——新庄——酒田——鶴岡——

山形地方道・街路の發達に就いて

關山隧道

新庄——山形——米澤——栗子——福島

次に東北地方の横斷路、且つは山形より直接に東北新文化の中心地たらしむる仙臺に通ずる車道の必要上擇ばれたものは關山街道である。即ち東根より亂川の上流にかゝり越えて作並温泉を経て仙臺に達するもので、始めは過大な掘り割りにする計畫であつた由だが後地元有志が三島縣令に諮り、且つ政府に懇願して容れられ、明治十二年隧道開鑿を開始した。之は栗子隧道と共に難工事であつたが大なる犠牲と艱苦によつて十五年竣工した。

時は三島氏は既に福島縣令に轉じて居たが落成式には山田内務卿に隨行して現地に臨席喜びの餘り次の歌を詠じて、

山を抜き谷を埋めて幾千代も通ふ車の道となりけり。

仙臺・山形を結ぶ唯一の良車道として以後盛んに利用され人力車によるスピード路であつた

殊に敏速を要する敗出物の一例として櫻桃オウゴンを述べるが現今は質量共全國第一を誇つては居るが之も三島縣令の試みの一つ、北海道から取りよせて新築に栽培し且つ獎勵して成功したが、即ち明治二十三年後鐵道が仙臺に通じた後、新鮮なるものを山形より人力車で關山新道を走らして仙臺に運び更に鐵道便によつて東京の市場に出して以來販路が漸次各地に擴大されたものである。

三島縣令後の道路

其後道路の發達は順潮に進んで十九年には荒川流域より小國本を経て新潟縣に達する街道、其他山形より直ちに宮城縣に通ずる笹谷峠米澤より會津への大峠等も追々に完通し、縣内も六十里越、狐越等の山道迄修築延長して、全く此地方道路交通の黃金時代が現出し、殊に山形を中心村山地方が車馬の往來頻繁となり、山形市街も爲めに頗る殷賑となつた。

明治三十三年鐵道が板谷を経て縣内に入り、

翌三十四年には山形市を過ぎて北進して以來、縣内各地の道路が之の影響を受けて發達した。

鐵道開設後の山形市況と街路

殊に山形市の香澄町(三の丸内)の閑靜な區域に俄かに街路が伸展して、こゝに設置した山形驛と古來の商業街が連絡した。

加之處々の空地が追々に填充されて官衙學校等の建設があり、驛前區の外に商工業者、旅館等集中する處も出來た。

特にこの區内は車輛の交通が多いが、之は驛と市中心商業地の間に介在し、且山形盆地を縦貫する南北の軸線道路を結ぶ位置になつた爲めと考へられる。

この香澄町が繁盛區域に加はり、又南北に長い商業街が更に北、新築へ延び、且諸官衙の續設に伴つての空地の減少、それに數回見舞れた大火災等の爲めに市の街路と商勢の變化が蓋し大なるものであつた。

商工業街の擴大する一方近時、市の東邊の高

燥な地帯が住宅街となるのは當然な成行きである。其最も著しいのは新築の東に續く字、築地町と其南へ寺町、及び小白川（昭和六年四月市に編入）の一帯で（主に官公職員や自由業者）増加が急激である。

之外、千歳公園より西北方宮町通との間が新興街として實業關係者が入り込みつゝあり將來の工業地帯として目される。

最近では南東部の地藏町から其東、東原耕地（以前の榮種・藍等の産地、今は日本一の櫻桃畑）が新住宅區として提供され、未だ來住者僅少ではあるが、縦横の街路が果樹園の間を通じてゐる。こゝは東南一軒に名勝地千歳山を控へて居り、殊に清新閑雅な部面として最も餘地を存して居る處である。

最近山形地方の道路

鐵道開通發達して、縣外への道路は爲めに其職能が著しく減殺され、荒廢しやうかと思つた處、近時自動車の利用激増と共に復興の機を得て、殊に關山隧道の如きは山形市に宮城縣海岸から直接且迅速な鮮魚の供給路として重要なものとなり、其他の道路も盛んに利用の度を高め得て今や鐵道と競争の狀態となつた。

且縣内道路が良好なること他に模範的であると言はれるのは何の爲めか、或はこゝに扇狀地が發達し、河川流路附近等から多量の砂礫が供給される故と考へられるも一方であらうが、思ふに五十年前 御巡幸があり、其前後即ち彼の三島子、縣令であつた以來、幾多の難關を突破して此山間地勢の不便を克服する道・街路の修築をした不斷の協力による功績の賜と考へるのである。（完）